



新約聖書の預言書の筆頭は、もちろん**黙示録**です。今まで『**ざっくり黙示録**』で1章から最後まで全部見て来ましたが、今日は『**ざっくりダニエル書**』。  
**ダニエル書**は終末預言について、旧約聖書の中で一番詳しい書です。  
ある人は「旧約の黙示録」と言いました。

いよいよ今日から、ダニエルが解き明かしていった終末預言に触れていきます。  
今日は**2章**前半になってますが、やっぱり全部やります。  
ものすごく長いんですが「ざっくり」ですよ。

## **ダニエル書 2章**

**1**ネブカドネツアルの治世の第二年に、ネブカドネツアルは何度か夢を見た。  
そしてそのために心が騒ぎ、彼は眠れなかった。

バビロンの勘定の仕方は変わっていて、新しい王様の治世の第一年は数えません。  
ネブカドネツアルの治世の第二年は実質3年目、紀元前632年です。  
ネブカドネツアルはバビロンが右肩上がりの時の、押しも押されもしない王として  
自信満々。ところが、パニックに陥ります。

ネブカドネツアルは何度か夢を見た。何度かということは繰り返して何回も。  
そして、夢は単数形なんですね。つまり、同じ夢を繰り返し繰り返し見たんです。  
良い夢を見た時、「この夢の続き見たいなあ」と思っても、なかなか見れません。  
なかなかじゃなくて、絶対見れない。

この間、「主よ、人の望みの喜びよ」を弾いているパイプオルガンの傍で、私が聖書の話をしている夢を見たんですが、パッと目が覚めたら、家内の目覚ましのメロディーだったという…。「はよ、切ってや！」また寝たんですが。

現実に起きていることが夢の中にブレンドされて、何かストーリーになることがあるかもしれません。しかし、一晩に全く同じ夢を何度も何度も見るというのは尋常ではない。生理現象の夢ではなくて神がかった、特にこの時代は、夢というものに特別な意味を読み取っているのです。これは神が、あるいは神々が、「私にどうしても分からせたいと思って見させてくださった夢なんだ」と思ったんです。

夢の内容は分からないけど、良い夢じゃないことは分かったんですね。  
ウキウキするような幸せな夢というよりも、1度見たら忘れられない。  
何度もその夢を見たので、これは神から来たのだと分かった時、彼は眠れなかった。  
そのまま夜を明かして、もう心がパニック。何か良からぬ事が始まるのではないか。  
国家のトップは何に気を遣いますか。安全保障ですよ。  
うちの国、大丈夫か？そこで彼は、国家安全保障会議を開きました。

**2**そこで王は命令を出し、呪法師、呪文師、呪術者、カルデア人を呼んで、王にその夢の意味を告げるように命じた。

- ①呪法師の「法」はなかなか良い翻訳だと思います。法は「のり」。  
呪法師はカルデアの古代文献・聖典・法典を研究している学者。
- ②呪文師の「文」は天文学の文。すなわち占星術の研究者。
- ③呪術者は魔術を使う人。今なら霊能者やカルトの大先生とかいう人。
- ④カルデア人は混血や外国から連れて来た捕囚の知者ではなく、生粋のバビロン人。

この4種類の人たちは国家安全保障会議のメンバーで、ネブカドネツアル王のブレーンです。王の頭だけでは分からない時に話し相手とか相談相手になる、国家の頭脳の上澄み液みたいな人たちを集めて「夢の意味を知りたい。」

**3 王は彼らに言った。「私は夢を見たのだが、その夢の意味を知りたくて私の心は騒いだ。」**

別の聖書では「悩まされている。」興味本位で知りたいのではなく、もう胸騒ぎで悩んでいる。パニック状態。何事にも動じないネブカドネツアルが、「私はこの意味が知りたくて、深刻に悩んでいる！」

3節までヘブライ語で書かれているのが、4節から突如アラム語に切り替わります。4節からはアラム語を話す人たちの会話だからです。

**4 カルデア人たちは、アラム語で王に告げた。「王よ、永遠に生きられますように。どうぞその夢をしもべどもにお話してください。そうすれば、私どもはその意味をお示ししましょう。」**

**5 王はカルデア人たちに答えた。「私の言うことは絶対である。もし、おまえたちが私にその夢とその意味を告げることができなければ、おまえたちは手足をばらばらにされ、おまえたちの家はごみの山となる。」**

**6 しかし、もし夢とその意味を示せたら、贈り物と報酬と大きな栄誉を私から受けることになる。だから、夢とその意味を私に示せ。」**

「どんな夢を見たかを当てろ。私が夢を言って、適当な解釈をするというのは駄目だ。」この夢は深刻なんです。当たっても外れてもどうってことないという夢じゃない。重大なメッセージが秘められており、正確に精密に知らなければならない。適当なことを言ってごまかすのは許されない。だから、どんな夢かも当てよ。

**7 彼らは再び答えた。「王がしもべどもにその夢をお話しくださいますように。そうすれば、私どもは意味をお示ししましょう。」**

これを聞いて、王はどう思ったでしょう。「さっき言ったこと聞いてた？王に何回も同じこと言わすな！」

**8 王は答えた。「私には、はっきり分かっている。おまえたちは私の言うことが絶**

対であると分かっているのだから、時をかせごうとしているのだ。

**9** もしお前たちがその夢を私に告げないなら、おまえたちへの判決はただ一つだ。おまえたちは時が変わるまで、偽りと欺きのことばを私の前に述べようと決めている。だから、どんな夢かを私に言え。そうすれば、おまえたちがその意味を示せるかどうか、私に分かるだろう。」

「適当なことを言うのではなく、客観的にこれは本物だということを知る根拠を見せろ」と言ってるんです。

これを読みながら、昔聞いた話を思い出しました。私はタレントの伊集院光（いじゅういん ひかる）さんが好きです。『100分で名著』の司会者ですが、地頭が良い。いわゆる東大に行くような勉強型というより、地頭というか「賢いなあ」といつも舌を巻いて、彼のことをよくチェックしてます。

ある人が彼に質問しました。「霊能者ってどう思います？」  
今も昔も、芸能人の将来を占う霊能者が出て来るじゃないですか。  
彼は話しました。「人が集まっている所に男が現れて、ポケットから煙草の箱を取り出し、テーブルにポンと置いて言った。『この中に獰猛なスズメバチが入っているから、だれも触るな。近寄るな。』そう言うとお出て行ってしまった。  
『そんなん置かれても困るやん。こんな所に』とみんな思うけど、やっぱり怖いから、だれも近寄らない。触らない。

そこへ何も知らない人が入って来て、『テーブル空いてる。なんで座らへんの？』  
『その箱の中にスズメバチが入っていて、すごい獰猛なんやて。』  
そのうちに、はじめからいた人たちが皆その場から去って行き、そこにいるのは、箱の中にスズメバチが入っているという話を伝え聞いた人たちだけになった。  
伝聞になると尾ひれが付きやすい。はじめは1匹だけだったのが、びっしり入っているということになったり。怖い。近寄ったら危ない。どうする？！

そこへ男が来て、『私はスズメバチの駆除業者です。お任せください。ただし私も商売ですので』と言って、みんなから駆除の費用を受け取り、自分のポケットに箱を入れて去って行った…。テレビ業界で働いている私がギリギリ言える霊能者の正体は、これです。」

つまり、箱の中は空っぽなんです。だけど、ある一定数以上の人が「そこに怖いものが入っている」と信じると、中身はなくても実質的な力を持つんです。  
日本人の文化の中に、中身や根拠はないけど、生活に影響を与えているものがあるんじゃないですか。  
仏滅に結婚式を挙げたらすぐ離婚する、友引に葬式をしたら列席した人が死ぬ。友引に死ななくても死ぬけど、友引にやったからやと。違う！生まれて来たから死ぬんです。だけど、「それは根拠がない」といくら言っても、一定数の人たちがそれを信じて、それが事実であるように行動したら、それに逆らうのは非常識なこと

をやっているとみなされる。実にナンセンスなことですよ。

おそらくネブカドネツアルは、色んな夢の解き明かしを聞いて育って来たと思いますよ。その際「ほんまかいな」とアラム語で思ったでしょう。でも今回は、今までの夢解きじゃない。国家の命運が掛かっている可能性が大きい。「夢の解き明かしは、どんな夢を見たかを知ることができる。それがでけへんかったら、おまえらみんな死刑だ！」

**10 カルデア人たちは王の前で答えた。「この地上には、王の心のうちを明らかにできる者は一人もおりません。どんな偉大な権力のある王でも、このようなことを呪法師や呪文師、あるいはカルデア人に尋ねたことはかつてありません。」**

これは非難の言葉です。礼節を尽くしてますよ。でも言っていることは、「どんな人でも、他人が見た夢を説明なしに当てることなんかできないし、それをやれと言う王様も、この地上のどこにもいません。」これはハッキリ言って、ネブカドネツアルを批判してるんです。普通なら「そらそうやな」となるんですけど、そうならないからネブカドネツアルなんですよ。こんな上司がいたら大変ですよ。

**12 王は怒り、大いにたけり狂い、バビロンの知者をすべて滅ぼせと命じた。**

すべて滅ぼしたら、これから王のブレーンおれへん。後先考えないと。いや、おつても無駄や。

**13 この命令が発せられたので、知者たちは殺されることになった。また人々は、ダニエルとその同僚たちさえ捜して殺そうとした。**

ここで一巻の終わりかというところじゃない。バビロンの中でたった1人だけ、王が見た夢を当て、その意味をも解き明かす人物がいたんです。

**19 そのとき、夜の幻のうちにこの秘密がダニエルに明らかにされた。ダニエルは天の神をほめたたえた。**

なぜなら、ダニエルは自分の能力で解き明かしたのではなく、天の神に教えられて、初めて知ることができたからです。

ここからは、ネブカドネツアルが見た夢とその意味を、ダニエル自身が解説しているので、それを見ながら、駆け足で世界史を勉強したいと思います。大学受験で世界史を専攻している人には、きっとお役に立てると思います。ざっくりですが、まず流れを知ることが、とっても大事なことです。

**26 それで王は、ベルテシャツアルという名のダニエルに言った。「私が見た夢とその意味を、本当に私に告げることができるのか。」**

**27** ダニエルは王に答えた。「王が求めておられる秘密を王にお示しすることは、知者や、呪文師、呪法師、占星術師などにはできません。

**28a** しかし天に秘密を明らかにするひとりの神がおられます。この方が終わりの日に起こることをネブカドネツアル王に示されたのです。

ダニエルは2つのことを言いました。「人間にはそんなことはできません。」  
「バビロンには人が作った多くの神々がありますが、天にはひとりの神、唯一の神がおられます。その唯一神が、終わりの日に起こることをあなたに示されたのです。」すなわち、その夢は終末預言だということです。

**32a** 「王よ。あなたが見ておられると、なんと、一つの巨大な像が現れました。この像は巨大で、異常な輝きを放って、あなたの前に立っていました。その姿は恐ろしいものでした。

王は怖いもの無しです。その王が震え上がるような姿をしていた。

**32b-33** その像は、頭は純金、胸と両腕は銀、腹とももは青銅、すねは鉄、足は一部が鉄、一部が粘土でした。

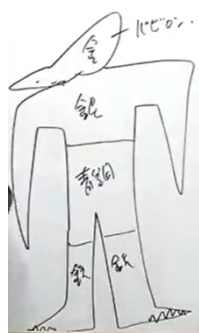
**34** あなたが見ておられると、一つの石が人手によらずに切り出され、その像の鉄と粘土の足を打ち、これを粉々に砕きました。

**35** そのとき、鉄も粘土も青銅も銀も金も、みなともに碎け、夏の脱穀場の籾殻のようになり、風がそれを運んで跡形もなくなりました。そして、その像を打った石は大きな山となって全土をおおいました。

これは、やがてこの世界に現れる5つの国のことです。

バビロンの時代から見ていくと、①バビロン、②-④の国があつて、最後の5番目が石の国。鉄でも粘土でも青銅でも銀でも金でもない、そんな金属と比べると何の魅力もない1つの石が、この像を木っ端みじんにして永遠に続く。

これからの世界を、この5つの発達段階で言っているんです。



動画でネブカドネツアルが見た夢のイラストが出てますが、どれも気に入らないんですよ。それやったら、私が描こうということで。漫画でしかないんですけど。

頭は金、胸と両腕は銀、腹とももは青銅、すねは鉄、足は一部が鉄、一部が粘土（鉄と粘土が混じり合っている）

**36** これがその夢でした。私たちはその意味を王の前に申し上げましょう。

**38 人の子ら、野の生き物、空の鳥がどこに住んでいても、これをことごとくあなたの手に与えて、治めさせられました。あなたはあの金の頭**（ネブカドネツアル王のバビロン）です。

バビロンが独立して帝国になるまで、エジプトから中東一帯を支配していたのはアッシリアです。エジプトからイラン辺りをオリエントと言いますが、東洋という意味です。広い意味では日本も含みますが、この時代、日本の存在は知られてません。オリエントを支配していたアッシリアに止めを刺したのがネブカドネツアル王です。

やがて、**アッシリア**があったところに4つの国が分立します。

- ①**バビロン** ②メディア（バビロンの東側、イラン高原）
- ③リディア（現トルコ辺り。人類史上初めて貨幣／コインで商売することを発明）
- ④エジプト（第26王朝エジプト）。

これら4つが全部アッシリアでしたが、アッシリア滅亡で4つの国に分かれた。

その中で一番勢いがあったのがバビロンですが、なぜ**金**でたとえられているのか。バビロンはユダヤの国を攻め立ててバビロンに捕囚しましたが、それだけではなく、ツロとシドンも攻撃したんです。

ツロとシドンはフェニキアの町です。当時から地中海貿易を一手に握っているのはフェニキア人ですが、ギリシア人が彼らを勝手にフェニキア人と呼びました。フェニキア人が持ち込む染料の中に、フェノメノン…似た名前があって、その人たちが持ち込む染料からフェニキア人と言ったんですね。

フェニキアから地中海貿易の商権を奪い取ったのがバビロン。フェニキアを落としてから世界中の貿易資金、特に金**が**バビロンに流れ込みます。バビロン州の首都バビロンにはたくさんの神殿があって、黄金でできていました。

**エレミヤ書 51 章**（**エレミヤ**は**ダニエル**が登場する前にいた人です。）

**7**バビロンは主の手にある金の杯。すべての国々はこれに酔い、国々はそのぶどう酒を飲む。それゆえ、国々は正気を失う。

宴会の時、杯にアルコールを入れてあおりますね。

だけど、杯にはもう一つ聖書的な意味があって、神の裁きを意味します。

バビロンは「俺たちは**金の杯**。リッチだ！イスラエルの神殿から持ち込んだ**金の杯**でぶどう酒をあおろう。イスラエルの神よりも我々の神々の方が上だ！」

威張ってるけど、やがて滅ぼされる。だけど彼ら自身は、滅ぼされる理由を祝福してるんですね。**金の杯**は**金の国バビロン**だったからです。

だれも滅ぼすことができない、と思われていたバビロンを滅ぼしたのが**銀の国**です。

**ダニエル書 2 章**

**39** あなたの後に、あなたより劣るもう一つの国が起こり、その次の第三の青銅の国が全地を治めるようになります。

**バビロン**の後に現れる国が銀の国で**メド・ペルシア**。これはメディアという国とその属国ペルシアの連合国家で、これがバビロンを崩壊しました。

ちょうど2本の腕が胸で1つになっているように、メディアとペルシアが1つにまとまって、最終的にはペルシアがメディアを呑み込んでしまいました。

なぜこんなことになったのか。メディアの方がはるかに大きいんですよ。メディアのプリンセスとペルシアのプリンスから生まれて来たのがキュロス王です。キュロス王の母方はメディア王家。父方はペルシアのロイヤルファミリー。半分づつの血が流れている。だから、王子として両方に顔が利く。「俺に免じて1つになろうよ」と言って、メド・ペルシアを結成しました。

しかし実は、彼はメディアが大嫌い。母方のおじいさんに殺されかけたからです。それで、属国だったペルシアがメディアを乗っ取り、最終的には**ペルシア帝国**になるんですが、どちらにしても、この2つが1つになって、バビロンを打ち倒すんですね。たった1日で叩きのめしてしまうんです。

ペルシアはリディアから貨幣経済を学びました。ペルシアの通貨は銀で、今でも銀の通貨がたくさん発掘されています。ペルシアは銀で動く国でした。**銀の国**。

ペルシアはエジプトからインダス川／インドまで、非常に広大な地域を支配する国でした。左右に広げた手の長さは、だいたい身長と同じと言われています。色んな身体の部位で表されている国の中で、一番デカいんですね。

メド・ペルシアはあまりにも広大だったので、ペルシアの中心からは遠くまで目が届かない。そこで、全国を20のブロックに分けて、それぞれ州知事を置きました。これをサトラップと言います。

サトラップが王に背かないように、いつも見張りを付けてました。

この見張りを“王の耳”とか“王の目”と言い、隠密です。不穏な動きがないか、いつもチェックしてて、不穏な動きがあればすぐに中央に上がるように、駅伝制度を完備していました。この駅伝制度のことは**エステル記**に出て来ます。

さて、キュロス王の時にペルシアが始まりますが、ペルシアの黄金時代はダレイオス1世の時代です。ダレイオス1世はエジプトからインダスまで全部治めてしまう王ですが、調子に乗り過ぎた。東の世界の中で、彼に逆らう者は誰もいない。それでヨーロッパに乗り出し、遂にギリシアと戦争することになります。

ギリシアとペルシアの戦争は、でかいのが3回あります。

#### ① マラトンの戦い (紀元前490年)

マラトンの戦場で、アテネ軍とペルシア軍が対決してアテネが勝った時、勝つか負けるか不安がっているアテネ市民に1秒でも早く勝利を知らせたいと思い、マラトンから1人の兵士が走りに走って「アテネは勝った！」と言って、バタッと倒れて事切れた。その走った距離が42.195キロ。このマラトンの戦いが由来となってマラソン競技が始まった…。

ウソです。出来過ぎた話って嘘が多い。特にギリシア人の話はほんまに眉唾。彼らのイマジネーション半端ないから。ギリシア神話見たら分かりますよ。

エーゲ海に突き出たアッティカ半島はほとんど山で、山の左側にアテネがあります。これはポリスで、1つの国なんですね。その山を越えた海岸に Marathon という海岸があって、ここに、ペルシアのダレイオス 1 世が 3 万人の兵を船で上陸させました。その時、アテネの兵士は全員かき集めても 9000 人しかいない。よそのポリスに頼んでも、応援に来てくれたのは 1000 人だけ。1 万対 3 万。

ギリシアのポリスの中で、陸軍が一番強いのはスパルタという国です。スパルタ教育ってあるじゃないですか。来ないのよ。スパルタでは、満月が出る前に軍隊を出さないという掟があるんです。古代史って、そういう神話みたいなものに支配されてるから魅力的ですね。

ペルシアの戦い方は弓です。まず弓をビュンビュン飛ばして、皆がパニックになっているところを一気にやっつける。それが分かっているんで、アテネ軍は 1500m 離れた、弓が絶対届かない所に陣を敷き、完全武装の重装歩兵で、士気が十分高まるまで待ちます。いよいよ突撃！弓がビュンビュン降ってくる中を猛スピードで突き進んで行き、体当たり戦でペルシア軍を打ち破りました。今までそんな戦い方の敵と対したことがないので、ペルシア軍は皆ビックリして、6400 人死んだと言われています。アテネの死者は 192 人。ペルシアの残りの 24000 人は船に乗って逃げました。

アテネ軍は「良かった…。」いや。9000 人を全部 Marathon の戦いに投入しているので、アテネに兵隊はゼロなんです。今、Marathon から船で半島の裏側を周ってアテネに行かされると、アテネは無防備状態なので一気に全滅。なので、戦ってヘトヘトの状態、しかも重装歩兵だから何十キロもの鎧を着ている兵士たちは、ペルシアの船が着く前に、山越えて戻らないといけない。もうノンストップで走った。これが Marathon の戦いなんです。心臓破りで死ぬ～！

着いたら、タッチの差でペルシア軍はまだ来てない。すぐに海岸に陣を敷いて待ち構えていると、ペルシア軍にしてみたら、さっき戦ったアテネ軍が、またこっちにいてる。これは勝てん。それで、ペルシアに戻ったんです。だけど、この戦いでペルシアは全然無理してないでしょ。小手調べなんですよ。これが 1 回目の戦争で、ギリシアは勝ったんですね。

## ②サラミスの戦い（紀元前 480 年）

2 回目は 10 年後。これは小手調べではなく、王が直々に戦場に出て指揮を取りました。その王は聖書に出て来ます。アハシュエロス王（クセルクセス王）。2017 版の聖書では、アハシュエロスの名が消えています。なぜ消えたのか。世界史ではクセルクセスの方が流通しているので、クセルクセスで統一すると書いてありました。そんなことでいいのか！とか思いながら。

前は3万。この時30万。陸軍30万、海軍1000隻。これを迎え撃ったのがスパルタで7000。7000対30万。スパルタは勇敢に戦いますが全滅した。これでペルシアは勢いに乗りました。陸軍で勝った。あとは海だ！

アテネの海軍は軍艦を櫂で漕ぐんです。当時の軍艦は船先に鉄の突起が付いていて、敵の船の横っ腹にバコンとぶち当て、穴を開けて沈める。昔の戦争の方が絶対怖い。これは、いかにして相手の横に付くかが大事で、機動力とスピードが必要です。スピードを増すためには、漕ぎ手が多い方がいいんですよ。普通の船は漕ぎ手が1列ですが、ギリシアの船は3列で、普通の船の3倍の漕ぎ手があります。そんな船を200艘造りました。漕ぎ手が200人だから4万人。

櫂を漕ぐのは奴隷の仕事です。3Kのキツイ・危険・汚い。だけど、アテネに奴隷は4万人もいません。それで、自分たちのポリス・共同体を守るために、奴隷の仕事でも、市民たちが自由意思で櫂の漕ぎ手になったんです。士気が非常に高かった。ペルシアは奴隷が漕いでいます。王に言われたから、こんな辺りな所まで来て。今のロシアとウクライナの戦いみたい。国を守るという意識の強さは防衛力になります。日本は最下位やからね。どうするんかなと。

ペルシア軍の陸軍は勝ってたけど、サラミスはアテネの沖合なので、アテネ海軍には潮流や座礁のポイントが全部分かっていました。誘い出されたペルシア海軍は、次々沈没していきます。

アハシュエロス王（クセルクセス王）は絶対勝てると思っていたのに、自分の船が次々沈んでいくのを見て言いました。「しまった！すぐ帰ろう。」兵士たちを置き去りにしてペルシアに帰るんですよ。

なぜ陸軍で勝ってるのに帰るのか。ペルシアの兵隊30万人の食糧や手当をどうするかなんです。ギリシアはほとんど山地なので食糧が取れない。30万人分の糧食は、ペルシアから船で輸送するしかないんです。制海権をギリシアに握られたということは、30万人が餓死するんですよ。そこの勝負にこだわってぐずぐずしていたら、自分もやられる。それで、たくさんの兵士を置き去りにして王様が逃げ帰ったのが2回目です。

### ③アレクサンドロス大王（紀元前331年）

この前、松本零士（まつもと れいし/1938-2023）が亡くなりましたね。宇宙戦艦ヤマト。地球を滅亡から救う放射線除去装置コスモクリーナーDがある惑星の名前がイスカンダルですが、これはアレクサンドロスのペルシア語読みです。アラビア語でもイスカンダル。宇宙戦艦ヤマトにも登場するアレクサンドロス。

アレクサンドロスの活躍はダニエル書の後半にたっぷり出て来るので、その時のために取っておきます。この人すごい。マラ톤の戦いは1万対3万で勝ちましたが、アレクサンドロスの最後のアルベラの戦いは4万対100万です。勝つんですよ。しかも作戦無しで勝った。あることで。あることについては、またいずれ。

100万もいるのに負けたということで、この時もペルシアの王は逃げたんです。3回とも逃げた。それで「こんな王はあかん！」とサトラップ（州知事）に裏切られて殺害されます。これをもって、ペルシアの時代は終わりました。アレクサンドロスが最後の王を叩きのめしたのが紀元前331年です。

アレクサンドロスは**ギリシア**（青銅）。ペルシアは紀元前331年に滅ぼされました。アレクサンドロスは22歳でギリシアから出陣し、33歳で死にますが、その間ペルシアと同じく広大な地を占領します。ペルシアの領土+ヨーロッパだから、もう凄いことになるんですが、最期は熱病で死にました。

死ぬ時、部下たちは聞いたんです。「後継者はどなたでしょうか。」アレクサンドロスは明確に「彼だ」と言わずに死んだので、後継者争いが始まった。これがディアドコイ戦争。ディアドコイはギリシア語で後継者の意味です。その凄まじい戦争で、1つだったアレクサンドロス帝国が4つに分かれるんですね。これが最終的に2つ残ります。セレウコス朝シリアとプトレマイオス朝エジプト。

アレクサンドロス帝国は腹とももは青銅。ももは二股に分かれますね。右ももと左もも。1つがセレウコス朝シリア。セレウコス朝シリアは、紀元前63年に武将ポンペイウスによって滅ぼされました。

もう1つがプトレマイオス朝エジプト。プトレマイオス朝エジプトは、紀元前30年にオクタヴィアヌスによって滅ぼされました。オクタヴィアヌス（アウグストゥス）はカエサル/ジュリアス・シーザーの養子ですよ。プトレマイオス朝エジプトの最後の王様は女性でした。クレオパトラです。彼女はオクタヴィアヌスに勝てないことが分かった時、自分の胸を毒蛇に咬ませて自殺しました。

この2つは消えますが、滅ぼした武将たちは同じ国の人です。ローマ帝国ですよ。ポンペイウスもオクタヴィアヌスもローマの人です。

ここからが問題なんです。アレクサンドロスから始まって2つになった国々にピリオドを打ったのは第4の国。これはローマから始まるのですが、ローマではありません。ローマを発祥としながら、ローマの影響を受けた国々。それが10の王によって支配される国々なんですね。

終末時代、世界は10個に分かれます。今の国連加盟国は193か国ですが、やがて10個になります。その国々はいずれもローマ帝国の影響を受けてるんです。すねは鉄。すねは2つありますが、東ローマ帝国と西ローマ帝国に割れるんですよ。実は、私たちが今受けている様々な思想や考え方・システムは、ほとんどグレコローマンの考え方です。ギリシア・ローマ文明からなんですね。それについては、また詳しく話したいと思います。

今見ているのは『ざっくりダニエル書2章』です。

ダニエルは世界の栄枯盛衰に関する預言を、章を重ねるごとに、より詳しく精密に与えられていきます。

今は、第4の国はローマが2つに分かれて、その流れを汲む世界が10個に分かれるというところで終わってますが、もっと詳しく、より複雑な発達段階を経て、最後はこうなるというのが7章に出て来るんですね。

いずれにしても、10の国に分かれている時に、人類は艱難時代に入ります。艱難時代の最初の3年半が終わった段階で、10の国のうち3か国が滅ぼされて、7か国になります。この7か国のトップが反キリストという人物です。これまで見て来て分かるように、これは世の終わりに至るまでのスケジュールなんですね。

今までの金・銀・青銅・鉄の国の後にもう1つ、5番目の国があります。石の国。  
**34 あなたが見ておられると、一つの石が人手によらずに切り出され、その像の鉄と粘土の足を打ち、これを粉々に砕きました。**

#### マタイ 21 章

**42 イエスは彼らに言われた。「あなたがたは、聖書（旧約聖書）に次のようにあるのを読んだことがないのですか。『家を建てる者たちが捨てた石、それが要の石となった。これは主がなさったこと。私たちの目には不思議なことだ。』**

これは「イエスなんかメシアじゃない！」と、イエスに反対しているユダヤ人の当局者たちに言っている言葉です。「私はイエスの権威なんか認めないぞ！」と猛り狂っている人たちに対して、イエスは旧約聖書のことばで反論しています。

「旧約聖書に次のようにあるのを読んだことがないのですか。『家を建てる者たちが捨てた石、それが要の石となった。』」

「あなた方はわたしに価値がないと言って捨てようとしているが、捨てようとしているその石こそは要の石（キリスト）である。」

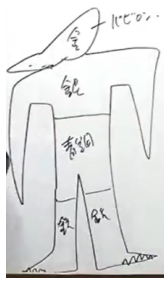
**44 この石の上に落ちる人は粉々に砕かれ、この石が人の上に落ちれば、その人を押しつぶします。」**

この石とは和解すべきです。もしこの石が落ちて来たら、どんなものも持ちこたえられません。人の帝国は足の10本の指の時代に、石が天から落ちて来て、鉄も青銅も金も銀も全部木っ端微塵にされ、跡形もなく消滅する。

そして、この石は全地に広がって大きな山になったと書いてあるのですが、聖書で山は国とか権威を表します。つまり、5番目の国は**メシア的王国（千年王国）**です。

①**金の国；バビロン**。②**銀の国；ペルシア**。③**青銅の国；ギリシア**。④発達段階を経て**反キリストの国**。反キリストがいる時代にキリストが地上再臨して、その国に止めを刺して5番目の国になる。この国は永久に続きます。だれも滅ぼせない。

さて、この像の体の配列から2つのことが分かります。



1) 体の下に行けば行くほど硬くなる。  
金よりも銀、銀よりも青銅の方が硬い。  
青銅は銅と錫（すず）の合金で、5%くらい錫が入っていたら軟銅。  
15%以上になると青銅は硬くなります。  
次が鉄。鉄の強さは鋭いですね。時代が進むほど、残酷で破壊力があるんです。

2) 比重が軽くなっていく。

金の比重は 19.3。銀の比重は 10.5。青銅は 8.9。鉄は 7.8。

これは水を 1 にした時、同じ量なら金は 19.3 倍ということです。

コップ 1 杯の水はだれでも軽く飲めるけど、コップ 1 杯の金はズシッと重いですよ。図に描くと安定しているけど、上が重くて下に行くほど軽いというのは不安定です。

つまり、人間が作るシステムや社会・帝国は天下無敵のように見せかけているけど、神の目で見ると、足元を崩されたら、いつでもあっけなく崩壊してしまう脆いものなんだということだと思います。

ところで、ダニエルはいわゆるバビロンの知者と何が違うのか。

バビロンの知者は自分の能力で様々な問題を解決しようとするけど、ダニエルはそうではなかったんです。

**16** そこでダニエルは王のところに行き、王にその夢の意味を示すため、しばらくの時を与えてくれるよう願った。

なぜ、しばらくの時を与えてくれるよう願ったのでしょうか。

王が見た夢がどんなものかは、時間をかけても分かるような問題ではないんです。

じっくり考えて分かる問題と、時間をかけても絶対分からない問題がありますよ。

他人がどんな夢を見たのかは、時間をかけても分からない。

なのに「しばらく時間を下さい。」それは王の心を読むために必要な時間ではなく、祈るために確保した時間だったんです。

**17** それからダニエルは自分の家に帰り、自分の同僚のハナンヤ、ミシャエル、アザルヤにこのことを知らせた。

**18** それは、ダニエルとその同僚たちがほかのバビロンの知者たちと一緒に滅ぼされることがないように、この秘密について天の神にあわれみを請う（祈る）ためであった。

異教の世界の只中で、たった 4 人しかいない非常な少数派。だけど、4 万対 100 万以上の大きな力の格差があっても、彼らには祈る相手がいたんですね。

祈って願いを献げるべきお方がいました。全知全能の神です。

そして、「一緒に祈ってくれ！」と頼んだ時、「祈るよ！」仲間がいたんですね。

これは大きかったと思うんです。

## 19 そのとき（天の神にあわれみを請うた時／祈った時）、夜の幻のうちにこの秘密がダニエルに明らかにされた。ダニエルは天の神をほめたたえた。

夢ではなく幻ですべて解き明かされた。その解き明かしがあったので、この後、ダニエルのポジションが全く変わってしまいました。

あるところで講演した時、クリスチャン女性がいました。社会人になって間もない時、友人から「聖書の話聞きに行かない？」と誘われたので、生まれて初めて教会に行ったそうです。

その教会は天国と地獄をハッキリ語る教会で、いわゆるボランティア活動や世の中を良くしようというのではなく、「人間は神の前に罪人である。自分で自分を良くすることなんかできない。人は死ねば永遠の地獄に行く。しかし、神はそうさせたくない。イエスが代わりに罰を背負ってくださったので、私たちはキリストを信じ、キリストの十字架とよみがえりを信じることで罪を赦していただけるのだ。」

自分の罪が分かっていたので、あまり時間をかけなくてキリストを信じました。当時はバイクをとばして教会に通っていたけど、お母さんがどっかの神社で交通安全のお守りを買って来てくれて、それを首から下げてブイブイやってたんです。でも、「お守り！こんなん人が作った物で、何の意味もない。」

私の子供も受験の時に担任がお守りを作ってください、「申し訳ないけど、僕はそれを付けることはできません。」それは捨てましたが、捨てる前に中を見てみようとして開封してましたね。そしたら、ボール紙にスタンプで“合格”って。彼はそれを庭で焼きました。

彼女は、この世界は湧いて来たんじゃないで、神様が私たちが喜ばせようと創ってくださったと思うと、街の木々を見ても見え方が全く違う。赦されているという喜びと、愛されているという喜びと、この世界が新鮮に見えるという驚きで嬉しくて、とうとうお母さんに、「良い話があります。私、クリスチャンになったんです！真の神様を信じたので、これからは、その方だけを礼拝して生きていきます。」「あんた、お母さんがあげたあのお守り、どうした？」「庭で焼きました。」「なにッ?!」

普段は温厚なお母さんが飛び掛かって来て、両手で首を絞めたんですって。その力が半端ない力で、首から取れない。思いっきり外して突き飛ばして。鏡の前に立ったら、手の跡が残ってるんです。それからは、その話をするとお母さんの機嫌が悪くなる。でも、そんな状況でも親子だから、絶対天国に行ってほしい。永遠のいのちを持ってほしい。「全知全能の神様、あなたは何でもお出来になるから、どうぞ助けてください！」

その時が来ました。お母さんは「キリストなんか信じたら、世の中渡って行けないよ！人との付き合いどうするの！」と言ってたんです。

実は、お父さんは付き合いがとてもし上手な人だったんですが、ある人の保証人になって、一夜にして全事業・全不動産・全財産、家から何から全部取られて、全国からやくざが取り立てに来た。大阪からも福岡からも全国から来た。一番質の悪いやくざは高松だそうです。なぜか知りませんが、あれは酷かったと言っていました。

もう脅されて生きた心地がしなくて、遂にお母さんと2人で夜逃げのように家をこっそり出て、教会の一室に住み込みました。ほんまに狭い所で、布団一組敷いたら隙間がない。あとタンスで、布団は2人分敷けない。「なんでこんなことに…」

だけど、お母さんはやっぱり昔の人で、教会に住んでいるから世話になってる気持ちがあって、自分にできる恩返しは、せめて全部の集会に出ることだと。それで、クリスチャン向けの学び会から福音集会から全部の集会、全部のメッセージを聞いていました。

半年ほど経って、みんながお祈りしてる時に、向こうの方で牧師さんが「お母さん、そろそろキリストを信じませんか？」「ハイっ！信じます！」  
みんなが「なにっ？ほんまか？！」と振り向いた。彼女はキリストを信じました。

ある時、歌なんか歌ったことないのに、歌いながら歩いてる。『歌いつつ歩まん』  
「財産全部取られた時、100がゼロになったと思ってたけど、よう考えたら聖書に書いてあるとおりや。元々ゼロから始まった。裸で生まれて来た。死ぬ時裸で帰って行く。ゼロで始まって一時的に100になって、もう一度ゼロになった。その経験を通して、罪の赦しと永遠のいのちを頂いたよ。これが歌わずにおれますか！」

お母さんは既に亡くなりましたが、彼女は「天国に行ったら母と再会できる！でも、母よりもっと会いたい方がいるんです。イエス・キリストですよ！母は300年後くらいでいい。まずキリストのところに行く」とか言ってね。

神様は祈りに応えてくださる方です。ダニエルは祈った。  
祈って応えられたことによって、彼らのポジションは激変しました。

**46** **それで、ネブカドネツアル王はひれ伏してダニエルを拝し、ささげ物と芳ばしい香りを彼に献げるように命じた。**

人に頭下げるなんてあり得ない王がひれ伏した。  
ダニエルの背後にいる神を感じたのでしよう。

**47** **王はダニエルに答えた。「あなたがこの秘密を明らかにすることができたからには、あなたがたの神こそ、神々の中の神、王たちの主、また秘密を明らかにする方であるに違いない。」**

これは、ネブカドネツアル王が聖書の神に悔い改めて信じた、というのではない。神々の中の神。たくさんある神を認めた上で、その中の一番上という意味です。

これは信仰告白ではありません。

よく「聖書の神を信じました」と言う人がいますが、よく聞くと「聖書の神も信じました」ということで、ズレてるんです。

唯一の神以外に真の神は存在しません。これが聖書のメッセージです。

**48** そこで王は、ダニエルを高い位に就けて、多くのすばらしい贈り物を与え、バビロン全州を治めさせて、バビロンのすべての知者たちをつかさどる長官とした。

**49** 王は、ダニエルの願いによって、シャデラク、メシャク、アベデ・ネゴに、バビロン州の行政をつかさどらせた。しかしダニエルは王の宮廷にとどまった。

すべての情報は王の宮廷に届くでしょう。王から最も信頼を受けていたダニエルは、最新情報にも接することになります。

それだけでなく、神を畏れる彼は、旧約聖書の研究に一層入って行くんです。

この2つを通して、3章以降、ダニエルの預言はますます精密なものになっていくんですね。

この預言を通して聖書の権威と信頼性、同時に創造主である神様、イエス・キリストに個人的に出会っていただけたら、本当に素晴らしいと思います。

ぜひその日が来ますように願いつつ、お話を終えたいと思います。

☆\*: .. 0 ...:\*☆ ☆\*: .. 0 ...:\*☆ ☆\*: .. 0 ...:\*☆ ☆\*: .. 0 ...:\*☆ ☆\*:

引用文献；新日本聖書刊行会『聖書 新改訳 2017』いのちのことば社,2017